The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「人生における目的」尺度作成とその規定因の検討
Author(s)	中原, 純
Citation	生老病死の行動科学. 2008, 13, p. 45-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12416
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

原著論文

「人生における目的」尺度作成とその規定因の検討

Development of the Japanese version of the Purpose in Life scale and an investigation of its factors.

（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程、日本学術振興会）中　原　　純

Abstract

This study aims to develop the Japanese version of the “Purpose in Life” (PIL) scale, and to find out its factors. Japanese PIL was back-translated by sociologist who was a native speaker of English. A mailing survey was conducted for randomly selected people between 65 and 74 years of age (n=590). The result from a set of analyses couldn’t indicate that Japanese version of the PIL was validated in Japanese young-old except 1 item (future orientation). So, analyzing in order to find out factors of “Future Orientation”, the result indicated that subjective health, academic career and subjective economical were positively related with “Future Orientation”.

Key word: Psychological well-being, Purpose in life, Future orientation, Young-old

Ⅰ　背景と目的

心理的なアウトカムを包括する言葉としての「心理的 well-being（psychological well-being）」に関する指標は、先行研究で多数開発されてきている。例えば、生活満足度を測定する LSI（Life Satisfaction Index; Neugarten, Havighutst, & Tobin, 1961）、モラールを測定する PGC モラール・スケール（Philadelphia Geriatric Center Morale Scale; Lawton, 1975）、不安を測定する STAI（State-Trait Anxiety Inventory; Spielberger, Gorsuch, & Lushene, 1970; Spielberger, 1983）、情動を測定する PANAS（Positive and Negative Affect Scales; Watson, Clark, & Tellegen, 1988）、気分を測定する POMS（Profile of Mood States; McNair, Lorr, & Droppleman, 1992）、抑うつを測定する CES-D（Center of Epidemiological Studies Depression Scale; Radloff, 1977）などである。そして、高齢者の心理的な側面での Successful Aging を検討する研究は、これらのいずれかの指標が従属変数となって、その規定因を探るという方法で行われてきた。その結果、年齢、経済状況、健康状態、最終学歴などの基本的な属性や地域活動、社会活動、ソーシャル・サポート、ソーシャル・ネットワークなどの社会・環境的な要因などとの関連が示されてきている（古谷野, 2003）。

しかし、これまでの先行研究では「そもそも心理的 well-being とは何であるか？」、ということに対する問いは不問にされたまま漠然と心理的 well-being の様々な側面が維持・増進されることが良いことであるという前提で研究が行われていた。我が国においても、「well-being」は主に「幸福感」と翻訳され、主観的幸福感（subjective well-being）という概念と心理的 well-being（psychological well-being）という概念は共に心理的なアウトカム全てに適応されるかのごとく使用されてきた。こういった現状に対して、Ryff（1989）は心理的

well-being の理論的解釈が行われていないことを批判し、従来の様々な先行理論を検討した結果、心理的 well-being を「人生全般にわたるポジティブな心理的機能」と位置づけ体系化した。Ryff（1989）の心理的 well-being は、「人格的成長（Personal Growth）」、「人生における目的（Purpose in Life）」、「自律性（Autonomy）」、「環境制御力（Environmental Mastery）」、「自己受容（Self-Acceptance）」および「積極的な他者関係（Positive Relationships with Others）」の 6 次元で構成され、Ryff & Keyes（1995）によって尺度化が試みられている。さらに我が国においても、西田（2000）が Ryff（1989）や Ryff & Keyes（1995）に基づいて尺度を作成し、妥当性や信頼性を確認している。

そして、この尺度を利用した研究として、西田（2000）は 55 ～ 65 歳の女性においては、就労者役割達成感や活動者役割達成感は「人生における目的」、「自己受容」、「環境制御力」および「積極的な他者関係」と中程度の相関を持つことを示し、子どもが物理的に独立する時期である 55 ～ 65 歳において、社会活動は重要となることを示唆している。また、Greenfield & Marks（2004）はフォーマルなボランティア活動に参加することで、配偶者役割、就労者役割、両親役割の欠如による「人生における目的」の欠如を緩衝しているという結果を示し、高齢期に役割アイデンティティを失った人に対して、ボランティア活動は生きる意味や目的を提供すると考察している。これらの先行研究から、Ryff（1989）や Ryff & Keyes（1995）の心理的 well-being、とりわけ「人生における目的」の側面は、今後社会活動を行うような高齢者が増加することが予想されている我が国において、重要なアウトカムとして位置づけられるはずである。

そこで、本研究では「人生における目的」を簡便に測定することのできる尺度の作成を目的とする。Ryff & Keyes（1995）の使用した「人生における目的」尺度は、「将来の方向性」、「目標や方向性の感覚の保持」および「新しい目標の保持」の 3 因子、合計 20 項目からなる尺度である。そして、大規模調査での使用を可能にする為に、各因子を代表する 3 項目で測定する短縮版が作成され、3 項目を合算した得点と 20 項目全体を合算した得点との間の相関係数（$r > .70$）を示すことにより、妥当性が確認されている（Ryff & Keyes, 1995）。以上から、本研究では、この短縮版の尺度の翻訳を試み、我が国における妥当性と信頼性を確認する。さらに、「人生における目的」に対して、基本属性が及ぼす影響に関しても検討を行う。

また、「生きがい」という言葉が「人生における目的」との類似概念として考えられるであろう。実際、Purpose in Life の翻訳語として生きがいが用いられることもある。しかし、我が国における生きがいは、「自分のやるべきこととやりたいことが一致したときが最高の生きがいである（神谷，1980）」と述べられたり、「生きがいとは、従来の QOL の構造に他人のためにあるいは社会のために役立っているという役割意識や達成感が加わったものである（柴田・長田，2003）」と述べられるように、人生の中で目的を持っているかどうかのみならず、その背景にある欲求や目標達成の評価までを幅広く捉えるものである。そういった観点では、本研究で扱う「人生における目的」は「生きがい」と同一ではないが、1 つの構成要素と考えられるであろう。

Ⅱ　方法

1．対象者

地方の中核都市である A 県 B 市在住の男女で、選挙人名簿抄本から無作為に抽出された

2008 年 1 月 1 日時点で 65 ～ 74 歳の男女 1,700 名に対して、郵送法による質問紙調査を行った。質問紙の返送が得られたのは 592 名であり、明らかに回答に不備のある対象者 2 名を除き、590 名（平均年齢 69.60 ± 2.60 歳）を有効回答者とした。なお、調査時期は 2008 年 2 月であった。

2．調査内容

基本属性

年齢、性別、主観的健康状態、最終学歴、主観的経済状況を尋ねた。

人生における目的（Purpose in Life）

心理的 well-being の 1 側面である「人生における目的」は 3 つの下位因子からなる合計 20 項目の尺度であり（Ryff, 1989）、Ryff & Keyes（1995）で作成された 3 項目の短縮版を翻訳し、英語を母語とする社会科学の研究者によりバックトランスレーションを行った上で、調査に使用した。日本語訳と英語の原文は Table 1 に示した。回答の選択肢は「1. 全くそう思わない」～「6. 非常にそう思う」の 6 件法で尋ね、PIL1 および PIL3 は逆転項目である為、得点が低い方が人生における目的の得点が高いことを示し、PIL2 は得点が高い方が人生における目的の得点が高いことを示す。

Table 1　人生における目的の日本語訳と英語の原文

	項目内容の日本語訳（原文）
PIL1;	私は、その日暮らしをしており、将来について考えることはほとんどない。（逆転項目） (I live life one day at a time and don't really think about the future.)
PIL2;	人生を通して無目的に徘徊しているような人もいるが、私はそのような人間ではない。 (Some people wander aimlessly through life, but I am not one of them.)
PIL3;	私は人生で、望んだことは全て成し遂げたと感じることがある。（逆転項目） (I sometimes feel as if I've done all there is to do in life.)

自尊感情

自己概念の 1 つとして捉えられる自尊感情について、Rosenberg（1956）の自尊感情尺度（10 項目）を用いた。この尺度は我が国においても翻訳が行われ、妥当性や信頼性が確認されている（山本・松井・山成，1982）。

生活満足度

自身の人生、生活あるいは老いに対する評価である生活満足度に関しては、LSI-k（古谷野・柴田・芳賀・須山，1989）を用いた。

3．倫理的配慮

本研究における調査は、大阪大学大学院人間科学研究科行動学系研究倫理審査委員会の許可（受付番号；19708）を得て実施した。

Ⅲ　結果

1．対象者の基本属性（Table 2）

本研究の対象者は、地方の中核都市における前期高齢者である。性別は男女ほぼ同数であり、主観的健康状態は良好な人が多いが、「あまり良くない」および「悪い」人で 2 割を超えていた。最終学歴は高校・高等女学校卒業が最も多く、主観的経済状況は普通である人が

最も多かった。主観的経済状況に関しては、「ややゆとりがある」や「非常にゆとりがある」の回答肢への回答者よりも「あまりゆとりがない」や「全くゆとりがない」の回答肢への回答者が多いが、都市部の前期高齢者に対して行った調査においても同様な分布をしていること（中原・藤田，2007）から、基本属性の主観的な評価という面では、都市部と地方の中核都市ではそれほど差がないと考えられる。

Table 2　対象者の基本属性

		n(%)
性別	0. 男性	290 (49.15)
	1. 女性	293 (49.66)
	欠損値	7 (1.19)
主観的健康状態	1. 悪い	20 (3.39)
	2. あまり良くない	110 (18.64)
	3. どちらともいえない	64 (10.85)
	4. まあ良い	351 (59.49)
	5. 非常に良い	38 (6.44)
	欠損値	7 (1.19)
最終学歴	1. 中学校卒業	170 (28.81)
	2. 高校・高等女学校卒業	307 (52.03)
	3. 短大・大学・専門学校卒業	97 (16.44)
	4. 大学院以上	2 (.34)
	5. その他	4 (.68)
	欠損値	10 (1.69)
主観的経済状況	1. 全くゆとりがない	52 (8.81)
	2. あまりゆとりがない	170 (28.81)
	3. 普通である	269 (45.59)
	4. ややゆとりがある	81 (13.73)
	5. 非常にゆとりがある	8 (1.36)
	欠損値	10 (1.69)

2.「人生における目的」の因子構造と信頼性の検討

「人生における目的」の各項目に極度の偏りがないことを確認した後、3 項目での因子構造を検討する為に、探索的因子分析（主因子法）を行った。その結果（Table 3)、固有値 1 以上の基準で 1 因子解が得られたが、1 因子での累積寄与率は 43.04 であるのに対して、2 因子での累積寄与率は 73.76 となった。また、逆転項目であるために、本来負の値で算出されることが仮定されている PIL3 の項目の因子負荷量が正の値で算出された。また、3 項目の信頼性を確認する為に、PIL3 を Ryff & Keyes（1995）同様の逆転項目として扱い、α 係数を算出した結果、-.21 という値が算出された。なお、因子分析の結果に従い、PIL3 を逆転項目として扱わなかった場合では、α 係数は .33 となった。

Table 3　人生における目的の因子分析

		因子負荷量	h^2	平均値	標準偏差
PIL3;	私は人生で、望んだことは全て成し遂げたと感じることがある。（逆転項目）	.42	.22	3.25	1.28
PIL2;	人生を通して無目的に徘徊しているような人もいるが、私はそのような人間ではない。	.45	.20	3.56	1.66
PIL1;	私は、その日暮らしをしており、将来について考えることはほとんどない。（逆転項目）	-.23	.05	2.87	1.46
	固有値	1.29			
	累積寄与率	43.04			

3.「人生における目的」の各項目の妥当性の検討

次に、1 因子で解釈することや 3 項目の信頼性が低かったことから、因子としてではなく、項目別に自尊感情や生活満足度との相関係数を算出することで、各項目の妥当性を検討した。その結果（Table 4）、PIL1 と自尊感情や生活満足度の間では、西田（2000）の「人生における目的」尺度や原版の「人生における目的」尺度の短縮版（Ryff, 1989; Ryff & Keyes, 1995; Keyes, Shmotkin, & Ryff, 2002）の得点と同様の方向性で有意な相関係数が得られた。しかし、PIL2 は関係の方向性は先行研究同様であるが、相関係数が有意でなく、PIL3 は相関係数は有意であるが、関係の方向性が先行研究と逆となった。

Table 4　人生における目的の各項目と自尊感情および生活満足度の相関係数

	人生における目的		
	PIL1	PIL2	PIL3
自尊感情	-.29**	.11*	.33**
生活満足度	-.27**	.04	.37**

$^{*}p < .05$, $^{**}p < .01$

4.「人生における目的」の規定因の検討

先述した相関分析により、PIL1 の「私は、その日暮らしをしており、将来について考えることはほとんどない。（逆転項目）」について、「人生における目的」を測定していることの妥当性が確認されたと考えられる（詳細は考察参照）。そこで、「人生における目的」の中の「将来の方向性」に関する次元の規定因を検討する為に、PIL1 を従属変数とし、基本属性を独立変数とした重回帰分析を行った。分析を行うにあたり、性別は男性を 0、女性を 1 として、ダミー変数を作成して投入し、最終学歴は「1. 中学校卒業」を「1. 学歴低」、「2. 高校・高等女学校卒業」を「2. 学歴中」、「3. 大学・短大・専門学校卒業」および「4. 大学院以上」を「3. 学歴高」、「5. その他」を欠損値として、分析を行った。また、性別によって基本属性と「将来の方向性」の関係に差がみられる可能性も考慮して、全対象者での分析と、男女別の分析を行った。重回帰分析の結果（Table 5）、全体としては、主観的健康状態が良好で、最終学歴が高学歴で、主観的経済状況が良い人ほど、「将来の方向性」を持っている、すなわち「人生における目的」を持っていることが示された。一方で、年齢が高い人ほど、「将来の方向性」を持っていないことが示された。しかし、年齢、主観的健康状態、最終学歴の

影響は男性において特に顕著であり、女性ではそれほど基本属性が「将来の方向性」に対して影響を与えていないことが示された。なお、主観的経済状況に関しては、男女ともほぼ同様な関連を示した。

Table 5　PIL1 を従属変数とする重回帰分析

	標準化偏回帰係数		
	全体	男性	女性
性別（0 ＝男性）	.05		
年齢	.09*	.16**	.04
主観的健康状態	-.08 †	-.11 †	-.03
最終学歴	-.16**	-.23**	-.10
主観的経済状況	-.13**	-.11 †	-.14*
R^2	.08**	.12**	.04*

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

Ⅳ　考察

探索的因子分析の結果から、3 項目を 1 因子で解釈することは困難であり、さらに「人生における目的」の下位因子を代表する 3 項目間の信頼性を検討する為に算出した α 係数の値が小さいことから、3 項目の信頼性は低く、同一の概念を測定している項目と捉えることも困難であることが示唆された。この結果について、先行研究で行われている調査においても「人生における目的」の α 係数はそもそも低いこと（α ＝.36）（University of Wisconsin, & Institute on Aging, 2004）から、項目の信頼性には課題を残している。ただし、Ryff & Keyes（1995）は､3 項目の短縮版と 20 項目版の高い相関係数（r >.70）を示すことによって、短縮版の妥当性を確認したとしていることから、我が国においても短縮版だけでなく、20 項目の日本語版尺度を使用し、相関分析を行う必要がある。この結果が良好であれば、本研究のように信頼性が低かったとしても、「人生における目的」を測定する 3 項目として合算した得点を使用することができるであろう。

上記のように本研究では 3 項目を 1 因子として捉える為の因子的妥当性や信頼性はえられなかった。そこで、「人生における目的」の下位因子を代表していると考えられる項目別に自尊感情や生活満足度との相関係数を算出した結果、先行研究（Ryff, 1989; Ryff & Keyes, 1995; Keyes et al., 2002）と同様の方向性で有意であった PIL1 に関しては、妥当性が確認されたと考えられる。しかし、PIL2 や PIL3 について、本研究の分析では、妥当性を確認することができなかった。以上から、項目別に妥当性を検討した場合、下位因子である「将来の方向性」を示す 1 項目のみ妥当性が確認された。

PIL3 に関して、我が国において妥当性が示されなかった理由として、「私は人生で、望んだことを全て成し遂げたと感じることがある」という項目は本来人生の目的がなくなった状態を示す逆転項目であったが、対象者はこの項目の内容を人生に対する満足と受け取ったため、生活満足度や自尊感情と正の相関が示された可能性が考えられる。また、PIL2 では、「人生を通して無目的的に徘徊しているような人もいるが、私はそのような人間ではない」という項目が表現として複雑であったため、回答者が正確に内容を反映した回答を行えていな

いことも考えられる。項目別の妥当性の検討は一連の先行研究（Ryff, 1989; Ryff & Keyes, 1995; Keyes et al., 2002）ではなされておらず、アメリカ合衆国のデータで本研究同様の分析を行うことによって、ワーディングの問題であるか、それとも我が国とアメリカ合衆国の文化的な違いなどから生じた差異であるかの結論が出せるであろう。

さらに、本研究の結果は、そもそも Ryff（1989）の「人生における目的」の構造を我が国に応用することの妥当性に疑問を投げかけるものでもある。しかし、生涯発達理論や臨床的知見から定義される Ryff（1989）の心理的 well-being の概念を捉え、応用することの意義は、西田（2000；2007）でも指摘されるように大きいと考えられる。そのため、今後、心理的 well-being を測定する尺度の原版の調査結果（Ryff, 1989; Ryff & Keyes, 1995）、原版の項目を全て翻訳した調査結果および Ryff（1989）の定義に従って我が国で独自に項目作成された尺度（西田，2000）の調査結果を総合的に検討し、我が国における「人生における目的」尺度についての最終的な結論を出さなければならないであろう。

また、尺度の確立は課題ではあるが、少なくとも Ryff & Keyes（1995）の尺度の PIL1 の項目に関しては、「人生における目的」の一部である「将来の方向性」を測定していると考えられるため、基本属性との関連を検討した。その結果、これまでの様々な心理的なアウトカム同様、基本属性は関連する可能性が示されたため、今後、「人生における目的」の維持・増進を目指すような規定因を検討する場合に、基本属性の影響を考慮しなければならないと考えられる。

なお、本研究では Ryff（1989）の心理的 well-being の概念を簡易に測る為の尺度を中心に検討を行ったが、これらは前期高齢者の結果であり、他の世代でも同様な結果が得られるかどうかは今後の課題である。

引用文献

Greenfield, E. A., & Marks, N. F. 2004 Formal volunteering as a prospective factor for older adults' psychological well-being. *Journal of Gerontology: SOCIAL SCIENCES*, **59B**, S258-S264.

神谷恵美子　1980　生きがいについて　みすず書房

Keyes, C. L. M., Shmotkin, D., & Ryff, C. D. 2002 Optimizing well-being: The empirical encounter of two traditions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82,** 1007-1022.

古谷野亘　2003　幸福な老いの研究　（編）古谷野亘・安藤孝敏　新社会老年学　ワールドプランニング，Pp.141-153.

古谷野亘・柴田博・芳賀博・須山靖男　1989　生活満足度尺度の構造―主観的幸福感の多次元性とその測定　老年社会科学，**11**，99-115.

Lawton, M. P. 1975 The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: A revision. *Journal of Gerontology*, **30,** 85-89.

McNair, D. M., Lorr, M., & Droppleman, L. F. 1992 *Profile of Mood States*. Educational and Industrial Testing Service, San Diego.

中原純・藤田綾子　2007　向老期世代の現在の生き方と高齢期に望む生き方の関係　老年社会科学，**29**(1)，30-36.

Neugarten, B. L., Havighutst, R. J., & Tobin, S. S. 1961 The measurement of life satisfaction. *Journal of Gerontology*, **16,** 134-143.

西田裕紀子　2000　成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究　教育心理学研究，**48**，433-443.

西田裕紀子　2007　生活の質（QOL）（編）柴田博・長田久雄・杉澤秀博　老年学要論　建帛社，Pp.132-139.

Radloff, L. S. 1977 The CES-D scales: A self-report depression scale for research in the general population. *Applied Psychological Measurement*, **1**, 385-405.

Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Prinston University Press.

Ryff, C. D. 1989 Happiness is everything, or is it? Exploration on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57,** 1069-1081.

Ryff, C. D., & Keyes, C. L. M. 1995 The structure of psychological well-being revisited. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69,** 719-727.

柴田博・長田久雄（編） 2003　老いのこころを知る　ぎょうせい

Spielberger, C. D. 1983 *Manual for State-Trait Anxiety Inventory*. Consulting Psychologists Press, Palo Alto, California.

Spielberger, C. D., Gorsuch, R. L., & Lushene, R. E. 1970 *Manual for State-Trait Anxiety Inventory(Self-Evaluatin Questionnaire)*. Consulting Psychologists Press, Palo Alto, California.

University of Wisconsin, & Institute on Aging. 2004 Documentation of Scales in MIDUS1. http://www.midus.wisc.edu/midus1/documentationofscales.pdf（2008.7.13 取得）

Watson, D., Clark, L. A., & Tellegen, A. 1988 Development and validation of brief measures of positive and negative affect: The PANAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54,** 1063-1070.

山本真理子・松井豊・山成由紀子　1982　認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究，**30**，64-68.